

人間の安全保障の「人間」とは？

佐藤 仁（東京大学 東洋文化研究所 新世代アジア研究部門 教授）

「人間の安全保障」とは、「国家」を基本単位とはしない安全保障のことである。国ではなく個々の人間を念頭においた安全保障を唱えたところに発想の特徴がある。もとより、長い歴史をもつ教育や保健分野における公共活動では、人間の安全保障という考え方が提示される以前から、国家に縛られることなく個々の人間をめがけて行われてきた。しかし、「人間の安全保障」を国家の安全保障に比肩する脅威への対応として位置づけ、個々人よりも政府を主たる相手にしてきたJICAという対外援助機関が打ち出すことには大きな意味があったのである。

ここで、少し立ち止まって考えてみよう。そもそも、ここでいう「人間」とはどのような主体を指すのか。「人間の安全保障」をめぐる議論の大半が、その言葉の後半にある「安全保障」の中身をめぐって展開されてきたのに対して、前半部分の「人間」の意味が案外見逃されてきたのではないか。なるほどSDGs（持続可能な開発目標）でも「誰一人取り残さない」というスローガンが打ち出されているように、開発協力の究極の対象を一人ひとりの人間とする考え方は、ごく一般的になっていると考えてよい。

だが、人間は一人で生きているわけではない。人間をどのような集団の一部と見なすかによって、そこに向けられる援助の在り方も変わってくるはずである。かつてアマルティア・センが指摘したように、人間は家族、地域社会、学校・職場、民族や国家など、様々な集団に同時に所属しながら、自らのアイデンティティを形成する（セン2017）。個々の人間の帰属先は目に見えにくく、なおかつ複数の領域を跨いでいるために、それらの相互関係は外部の目には特にわかりにくい。しかし、例えば難民支援が、難民キャンプの在り方だけでなく、難民の出身地域に残った家族や仲間との関係を踏まえて措置される必要があるのと同じように、「現場だけ」に視野を限定してしまうと、課題の本質も、対処方法も的外れになる。

家族であれ村落や自治会といった地域に根付く共同体であれ、いざというときに最も頼りになるのは、こうした身の回りの帰属先である。そう考えると人間の安全保障は、必ずし

も「一人ひとり」を相手にしているのではなく、何らかの集団に属する「一人ひとり」を相手にしているということがわかる。ここで「集団」というのは、教会やモスクといった宗教的な集団かもしれないし、民族や出身地にもとづく人的ネットワークを指すのかもしれない。あるいは農協や漁協といった職業集団もあれば、労働組合のような社会経済的な地位にもとづく結社もある。

個々人を独立した主体として考える思想的系譜は、西欧思想ではエマニュエル・カントにさかのぼることができる。フランス革命やアメリカの独立宣言などを通じて鍛え上げられ、ヒューマニズムを体現した概念である「個人」は、国家権力から「独立した人」を意味する。ところが、日本では「各個人」「一個人」のように、あくまで集団の一部を成す個人という捉え方が長く定着してきた（石神2012）。

それでも、日本が欧米流の「個人」を熱心に取り入れようとした時代はあった。その最も顕著な例が、個人（individual）を国家（national）と対置して、前者の独立こそが国家にとって重要であると説いたサミュエル・スマイルズのSelf-Help（自助論）の教科書採用である。明治時代の初期に『西国立志編』として邦訳された自助論は、新たに近代的な教育機関として設置された小学校の教科書に採用された。福澤諭吉の『学問のススメ』と並んで当時の日本でベストセラーになった自助論は、国家の基礎を自立した個人の確立に求めた点で、文明開化の日本にふさわしい理念として当時の教育分野の指導者らに強く支持された。次の文章はスマイルズの考え方を要約した部分である（Smiles 1872, 2、引用者訳）。

政府なるものは、その国を構成する諸個人を反映したものに過ぎない。政府が人々より先に進んでいても、やがては諸個人の水準まで引き下ろされるであろうし、人々のほうが優れていれば政府はやがてその水準まで押し上げられることになる。（中略）高貴なる人々は高貴なる統治を受け、無知で退廃した人々はその程度にしか統治されない。私たちの経験が教えてくれるのは、国家の力

本レポートで述べられている見解は執筆者個人の見解であり、JICA や JICA 緒方研究所としての見解を示すものではありません。

というのはそれがよって立つ制度に依存するのではなく、人々の品行 (character) に左右されるのである。

今であれば迷うことなく「個人」と訳される individual という原語に、この本を明治時代に初めて邦訳した中村正直は「人民」を充てた。「人民」は、「人々」という意味である。現在であれば「個人」を充てるべき「一人ひとりの人間」を想定していたスマイルズの議論は、日本の文脈に翻訳される過程で「人民」という集合的なニュアンスの強い概念に置き換えられたわけである。「個々人の権利」という本来の力点が、主語が不特定多数を指す「人民」になったことで原著者の意図は曖昧になってしまった。明治期の日本で individual を単数形として翻訳する適当な言葉がなかったのである (丸山・加藤 1998)。

それでも、スマイルズの自助論が明治維新直後の日本に新鮮な風を吹き込んだことは間違いない。自助論がヒットした背景には、日本に長く根づいていた家族や村、藩といった共同体の封建的な集団主義、家族主義、村社会に対する反発もあったからであろう。それでも相互扶助を原則とする日本の農村社会では、互いに依存しあいながら生きることは避けられない現実であった。

こうした中で明治の中期に入って天皇を中心とする国家主義の機運が顕著になると、個人を柱にしたスマイルズの思想は、むしろ疎ましいものになった。「仁義忠孝」へと儒教的な伝統に回帰した文部省によって、『自助論』は採用からわずか 10 年で教科書としての使用を禁じられてしまう。人間一人ひとりという意味での個人が日本に定着し、それが国家に認められるまでには、まだまだ時間が必要だった。

単数形としての個人の定着は、現代になっても十分とはいえない。「人づくり、国づくり、心のふれあい」というスローガンは、長く JICA の標語として親しまれた考え方である。現在に至っても、「人」が個々人を指すのか、何らかの集団の一部を成す人であるのか、その共通理解はないように思われる。家制度の解体、町内会や自治会といった地域集団の弱体化は、一見すると「個人の時代」の本格的な到来を予感させる。たしかに、インターネットの普及は、諸個人の自由を拡大し、ネット上でのコミュニティ形成を促すことにもなった。しかし、その反面で、孤独死や引きこもりなど、そうした個人をささえる集団の欠如が社会問題になっていることも見逃せない。

個人が個人として自立するためには、周りの支えがなくてはならないという忘れられた事実を、日本は再び思い出そう

としている。個人を単数としてみる視点は、一人ひとりの人間が多様な特性を持っている点で、大事な視点である。しかし、広がる格差や不平等の背景には、孤立した個人が増えていたり、頼れる人や組織が身近にないという構造的な課題が横たわっているのではないか。開発協力は、現代の資本主義社会にまん延する「これをするから、あれをして」という何らかの互恵的な取引からはみ出す、国境を越えたケアとしての性質をもつ。必ずしも等価の見返りを求めて行われる行為ではないからである。

そもそも現代社会は、自立した諸個人同士の契約関係からのみ成り立っているわけではない。介護や子育ての例を出すまでもなく、誰かに依存しなければ生きていけない非対称な人間関係は、われわれの身の回りで大きくなっている。そもそも、現に生存の脅威にさらされている人々に何か見返りを求めて援助するのは現実的ではない。だからこそ、脆弱な個人を支える身近なシステムとしての中間集団を見る必要が出てくる。

「人間の安全保障」には、「個人だけ」を見ようとするのではなく、対象となる人々がどのような諸集団に帰属しながら生きているのかという視点が不可欠になる。そうした諸集団が、生存を脅かす様々なショックを緩和する機能をもっている可能性に目を向けるのである。つまり、人々の暮らしを取り巻いている様々な中間集団の性質を見極め、抑圧的な集団を制し、開放的な集団への依存の分散を促すような支援を考えるのである。長期的には中間集団の選択肢を増して、その地域に根差した方法で脆弱な個人を救い出すようなメカニズムを維持・拡張する必要もある (佐藤 2023)。

まずは、大前提となる「個人」の再定義をした上で、単数形としての個人が、国家以外の複数の集団に頼って生きられる道筋を見出すことである。これは、国家そのものが生存の脅威になるという、目をそむけたくくなるような危機にさらされている国や地域においては、なおさら言えることである。

参考文献

- 石神豊, 2012, 「個人主義とヒューマニズム—現代の思想的課題としての両者の関係—」, 『創価大学人文論集』, 24: 73-103.
- 佐藤仁, 2023, 『争わない社会—「開かれた依存関係」をつくる』, NHK 出版.
- セン, アマルティア, 2017, 『グローバリゼーションと人間の安全保障』, 平凡社.
- 丸山眞男・加藤周一, 1998, 『翻訳と日本の近代』, 岩波新書.
- Smiles, S. 1872. *Self Help with Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance*. London: John Murray.